

## 朝礼中、ホワイトボードに向けた顔を みんなの方に振り向けば

クルクルクル。親指と中指を器用に回転させながら、若干2名の子がマスカラを付けながらこちらをじっと見ている。（何センチのまつ毛にするの？・長くしたいの？厚くしたいの？・前がみえるの？・ずっとやってるんですけど、何分やるの？お口が半開きなんですけど、それはいいの？）心のなかで何回もつつこむよ。

まだいいんだ、これは。端っこの席で又、朝から揚げ物食べてるの？その指の油を舐めながら、もう一つの手にもってるのは、マジックだけ。（え？マジックで何してんの？眉毛書いてるの？え？水性だから、落ちるから大丈夫って）そうか、問題はそこなんだね。

お隣は、鏡見て真剣に何してんの？えええええ、鼻毛抜いてるのお？

「お客様のところに行ったときに、出ていないように・・・」

そうか、そうだよ。理屈にあってる？のか。

ここは、どこなんだ。今、何やってんだ私。思いつきり口角を上げて、にっこり笑いながら「はい、今日の活動は？」「しくしく」・「どうしたの？」「しくしく」・（えー私が聞いたからいけないの？なんで、泣くの？すぐ泣くの？いやだ私が悪い人みたいじゃないの？）

とにかく泣く。すぐ泣く。よく泣く。そのたびに胸が痛んだが、1、2時間たつとケロっとしてる。気が付きました。この子の涙は、汗なんだ。汗をかくのは普通だろうと思ったら、全然傷つかなくなった。

この頃の支部には、いろんな人がいた。まあ、今でもそうですが。新卒の子、若いママ、専業主婦、転職者、などいろんな経歴やバラバラな年齢層。一筋縄ではない人達と毎日を過ごしてきたわけです。

共通点は、仕事好き。

夕方になると、学校・幼稚園・保育園を終えた子供達が支部を走り回り、お母さんは夕方訪問企業やアポイントに行く。

とにかく、毎日大人や子供が入り混じり、一日として何事もなく終わった日はありませんでした。

実は、20年たった今、先程のマスクラ2名、揚げ物、鼻毛、泣き虫。この5名は、支部の責任者である支部長の仕事をしているのです。

マスクラ2人は、姉妹なのですが、姉の方は女子大を卒業したはずなのに、敬語の使い方がわからない。

「こんにちはです」「こちらお願いですます」南国チックな容姿も手伝って「日本に来てどのくらい？」と外国人に間違えられ、捨ててはいけない重要書類を自宅のごみと一緒に廃棄。私からスリッパで殴られる始末。（今ではパワハラですが）この姉妹、早朝、会社で掴み合いのケンカ。理由は何？

アンパンを黙って食べた事？・・・食べ物への恨みは恐ろしい？？つか、確か20歳以上じゃないと入社できないはずだけど、「会社辞める」「もう辞める」に発展するって子供かよ。

でも、2人とも仕事が好き。姉は、頭に小さな腫瘍ができ、手術後帽子をかぶり出入りの会社で傷痕をみせながら、保険の大切さを沢山の人に伝える捨身の営業

をする。妹は、不器用だが努力家で粘り強く、家族の事でいろんなピンチを迎えても、それを乗り越え、お客さまやメンバー達に支えられ毎日笑顔で仕事をする。そして、いつの間にか、沢山のお客さまから信頼を頂く仕事を2人とも身につけているのです。誰が教えるわけではなく、お客さまから、たくさんのお話を教えて頂いているのです。

揚げ物さんは、毎日の積み重ねのおかげで、今では大分ふっくらなさってる。議論好きの彼女は、とにかくいろんな事で、つかかってくる。ああ言えばこう言う。私が怒るまで続ける、「そのステージ」を仕事によって得ることが出来てから、目にみえるように変わっていったんです。それが彼女のコミュニケーションの取り方と気が付くまで随分面倒くさい人と考えていた。

専業主婦だった彼女が、沸々と表しきれない不満を持ち、今まで与えてもらえなかった自己表現、心の中に溜まっていたフラストレーションが一気に抜け出ていったのでしょ。霧がかかって未来が見えなかった彼女が、明るい未来と自分自身に對する自信が、今では身に付けることが出来たんですね。

鼻毛さんは、一家の大黒柱として2人の女の子を育てている。逃げ道のない彼女

は、必死である。私も、彼女を路頭に迷わせない覚悟で採用することを決めた。ただし、彼女はあり得ない経験をしているので、とても強いのです。乳飲み子をかかえながら、水道、ガス、電気も止められ、風呂もトイレも使えず公園のトイレを使い、公園の水道で体を洗い、実家にも頼らず何とか生きてきたと、ケラケラ笑いながら話す。

だから、少々の事には動じない。裏表がなく嘘が言えないので、損な性格ではあるが、人のせいにならず、常に前向きである。

実は私が継承を考えたときに、2人の候補がいた。支部長として相応しいのは損をしてもいいと思える人。そして、私達の仕事は可能性を求める仕事であるので、リターンもあるけれどリスクもある。そのリスクに向き合える心があるのかという事が重要ポイント。だから、彼女が適任でした。

私とは、カラーが違う事で反発もあつたろうが、それを乗り越え今では、すっかり彼女色に変わっている。大したものだなと感心しています。

5人目の涙ちゃんは、茨城から妊婦の時にご主人と2人で頼るあてもなく出てきた冒険者であるが、根が明るいのでどんな困難も乗り越える本当は強い人である。

とにかく立ち直りが早いのです、なにを言われても、お客さまに断られても、すぐに立ち直る。

今は、彼女の上司だった女性が残した支部を立て直そうと必死なのです。加えてその上司が退職をして他社にいき、彼女の支部の人材を引き抜き、契約を乗り換える行為をされても、めげることなく毎日スマイルを武器に闘っているのです。

ファイトオ！

どう考えても彼女たちは、一般的にいう優秀人材とは言えないだろう。

人はどれだけの可能性を持っているの。あの時諦めていたら、あの時受け入れていなければ、彼女達は今この仕事をしていなかったかもしれない。長い年月を共にしながら、嬉しいこと、悔しいこと辛かったこと、楽しい事を積み重ねて、一緒に過ごしてきた。ある意味、家族よりも濃い時間を生きてきたのかもしれない。

もちろん、支部長の仕事をしていないけれど、一緒に旭ブロックを作り上げてきたのは、私の大切な宝物である旭ブロックのメンバーである一人ひとり。

旭ブロックで仕事をすることを誇りにしてくれ、共に歩む事を選択し、きっと長である私に理不尽さを感じたり、憎らしいと思うこともあつたろう。

それでも、一緒に歩んでくれ、人生の大切な時間を過ごしてきてくれた事は、一つの奇跡。いろんな偶然、必然が重なって、今この時を迎えている。

本当にありがとう。感謝です。

そして、人生は生きてみなければわからない面白いことで満ちているから、やたらに諦めたり、逃げたりしてはいけない。未来を楽しむことは、自分たちで作り上げていくしかないんだと思う。

彼女たちが、定年を迎え、「あー、やっていて良かった」「楽しい仕事だった」「面白かった」「辞めたくない」と思ってくれる事が私の幸せなのです。だから、この仕事の魅力を伝えたかったし、彼女たちの魅力を引き出したかった。それが、「旭モデル」を作るという事につながっていくんです。

※『旭図鑑・6センス』として発表します。

## 私達の仕事は、社会保障の補填の仕事である

今から、20年近く前。相変わらず生命保険のおばちゃん、お姉ちゃん、という世間の扱い。「この仕事だけは、やりたくない」「娘にはさせたくない」という偏見。

「おい、姉ちゃん。お酒付き合ってくれたら、一本付き合ってもいいよ」なんて時代でした。

もちろん、こちら側の問題もあったと思います。

社会保障の基本よりも、設計書の枚数、当たって砕ける。保障額の大きさ、営業員の競争力などに、重点が置かれていたんですね。

だから、誇りの持ち方や、やりがいの在り方が弱かったんだと思う。

「凄い、凄い。頑張れ」「自信を持って」と何回も言葉を掛けても、どこか埋まらない心と現場。